

パネル

近角常観と知識人青年

——三木清と武内義範——

岩田文昭

田邊元が自身の一高時代を回顧して述べているように、近角常観は、内村鑑三らと並び評されるほど、当時の青年知識人に影響を与えた。その影響範囲は、古澤平作を介しての精神分析運動、伊藤左千夫や宮澤賢治といった文筆家、三井甲之などの超国家主義者たちら極めて多岐にわたる。ところが、近角が日本近代精神史に占める意義については、ほとんど研究されてこなかった。しかし、近角という存在を念頭におくことで見えてくる思想的連関が存在する。そのことを三木清と武内義範の思索を例にとって論じてみたい。

三木も武内も学生時代に近角に親近していた。そのことを両者は著作上にも記している。だが、このような両者に思想的連関があることに気付かれることはなかった。だが、三木の遺稿『親鸞』は武内の『教行信証の哲学』の根幹にある思想を援用している。これまで、この事実が看過され、武内に由来する思想を三木の思索と誤解されてきたのである。そもそも、三木はわざわざ武内の著作を人に依頼をして入手しようとしていた。その結果として、武内の思想を取り入れたのである。三木が依拠した内容は、第一に、正像末の史観が親鸞の三願転入の自督文の超越的根拠になっていると見なすことにある。この考

え方が第二に、罪惡を自覚する独特のあり方への理解につながる。悪を惡として自覚するには、その基準・標準となるものが必要である。ところが、末法の時代にはその自覚の根拠が不明となる。これに対して、親鸞の思想構造は、基準となる正法を想起し再現することで悪の自覚を可能にしていると捉えるのである。第三に、正像末史観と浄土教史観は表裏一体なものであると三木は武内にならって記している。このような三木の武内への依拠は、三木と武内がともに近角に親近していたことに着目することで、始めて視界の中に入ってきたのである。

ここで大切なのは、三木と武内が思想を共有した理由の探究である。両者はその哲学的関心もその個性も相当に異なっていた。しかし、青少年期において仏教的 worldview に共感を抱いていた。そして、日本の近代化が進展する中で、かつての世界観が日本人の存在の根拠として成り立ちえないことを痛感していた。そのような両者が『教行信証』の中に、歴史的社會と人間の存在根拠に関する独特の理論、悪を惡として自覚させる屈折した倫理的 worldview を見出し、その理論に共鳴したのである。その理論とは、現実社會に機能している規範としてではなく、歴史的 world の中で、いわば痕跡の如きものとして善を想起させる理論であった。

近角との関係に注目することで三木の思想に対しても、新たな展望が開かれてくる。従来、三木の宗教理論に対しては、多くの言及がなされてきたものの、その理論を真正面から取り扱ったものは少なかった。しかし、近角を基準点とおくことで、三木の宗教哲学の一貫した姿が次第に現われてくる。三木の最

初の草稿『語られざる哲学』は、近角が強調した「懺悔」を哲学の方法として取り上げ、「よき生活を可能ならしめる」ために「絶対者の存在」を要請する。そして、「語られる哲学の根柢」の探究を自らの課題とする。『パスカルに於ける人間の研究』では、パスカルの図式を借りながら、「宗教的不安」を真理探究への動力源としつつ、哲学がそれ自身では完結せず、宗教によって完結する姿を描いている。『構想力の論理』はパトスとロゴスの総合の根源を探究しつつ、その根源にあるものを見据えている。近角自身の説教の核心には、人間の情感・身体への深い理解と歴史宗教への洞察が存在していた。その洞察に共鳴をした、若き哲学者がその生涯にわたって探究した思想の意義を見通すという点においても、近角という視座は有意義なものだと思われる。

近代大谷派における近角常観の位置

ライアン・ワルド

近年、清澤満之（一八六三—一九〇三）に関する研究が多く発表され、清澤の教団改革運動（いわゆる「白河党運動」）が再評価されている。一方、清澤と同時代に活躍していた近角常観（一八七〇—一九四一）に関する研究は皆無とといっていいほどないというのが現状である。さらに、昭和初期に近角が主唱していた「宗門革新運動」は日本近代仏教史の研究から完全に

忘却されている。それは何故であろうか。いくつかの理由はあがるが、結論からいえば、晩年の近角は教団にとって「厄介」な人物であったからではないか、という事である。そのため、彼の歴史的位置づけはややデリケートなものとなっている。

近角の「宗門革新運動」は昭和四年に僧籍を削除された大谷光演（句仏）（一八七五—一九四三）を擁護するという運動であったという意味に限っては、大谷家の伝統を護る運動であった。戦後における大谷派の「宗派改革」運動とはベクトルを異にしているため、やや不都合な事実であるかもしれない。しかし、近代における大谷派の歴史と教団の動向を考察するにあたって、これは不都合な事実ではなく、不可避な課題である。

近角によれば、句仏の僧籍削除は大谷家の連枝と阿部恵水（一八七〇—一九四五）内局による一種の「クーデター」であった。そのため、近角は、阿部内局を打破し、句仏の僧籍復帰を実現しなければならぬと主張した。横田秀雄（一八六二—一九三八 大審院長）、犬養毅（一八五五—一九三三 第二九代内閣総理大臣）、濱口雄幸（一八七〇—一九三一 第二七代内閣総理大臣）、山川健次郎（一八五四—一九三一 枢密顧問官／貴族院議員）、柏原文太郎（一八六九—一九三一 東亜同文会の幹事／衆議院議員）などといった有力な政治家に支持されつつ、近角の「宗門革新運動」は全国的に展開していく。時には激化したふしもあったため、当時のメディアに注目され、その動向が多く報道された。

近角が大正時代に出版していた『求道』といった「信仰告白雑誌」などに見られるように、彼は大谷派といった狭いセクタ